戦　争　体　験　　富士市遺族会　関口純一

昭和 11 年生まれの私は［終戦を告げる玉音放送］を小学三年生の 8 月 15 日に、疎開先の山梨県笹子村（母の実家）で聴き、大声で泣いた事を今でも覚えています。今日は、東京で生まれ育った私の小学校一、二年生時の学校生活をつづってみます。

昭和 18 年 4 月、東京都王子区立王子第 4 小学校に入学、学校は［木造 2 階建ての校舎］と［全面がアスファルトで舗装され地面が全く無い運動場］が、高いコンクリートの塀に囲まれていました。正門と裏門には鉄製の高い門扉があり、7 時 30 分～8 時の登校時と午後の下校時間帯だけ開扉されました。
生徒は登校すると門の前で上履きに履き替え手提げに入れて運動場や昇降口を通って教室に入りました。

昭和 19 年になると戦争が激しさを増し、五、六年生は学童疎開、三、四年生は縁故疎開、一、二年生は未だ幼く可哀想なので親元に残されたのですが、多数の子は親の考えで縁故疎開をしたので生徒数はわずかになりました。夏休みが終わり登校してびっくり仰天！学校中の机や椅子で運動場に大きな基地が築かれ、国防軍人が訓練をしていたのです。また、一階教室は床板が 2 平方メートル程切り取られ、はしごを下りると地面を深く掘った防空壕でした。空襲警報発令！急いで入ると真っ暗で何も見えず、べたべたの泥土が体中に付着し気持ち悪かったです。

昭和 20 年 2 月には私と年配女教師の二人だけになり、仕方なく 2 月 28 日冒頭の所へ疎開した訳ですが、3 月 10 日夜の大空襲で家も東京全土も焼け野原になった事を思えば命拾いをしたものです。

母　を　想　う　　富士市遺族会　池田恵子

母と永遠（とわ）の別れをしてから早 10 年の歳月が流れた。

私が物心ついた頃には、父はもう亡く、母と生後 2 ケ月足らずの妹と 3 人で母の里の狭い「離れ」で細々と暮らしていた。母は実家の農業を手伝い食物は何とか調達できていたらしい。

私が小学校に上がって間もなく父の実家に移り、母は仕事探しを始めたが、終戦後間もない時で保育所も幼稚園も無く、まだ手が掛かる子持ちの女性の就職口はなかなか見つからず途方に暮れたと言う。

母はそんな苦労話を滅多にしなかったが、大人になった私の幼いころのかすかな記憶の中に母が朝早く私と妹を寝床に残して出かけることが度々あった。

どこへ何の為に行ったのか尋ねると、職探しが行き詰まり、熱海の旅館へお米を売りに行ったと言うのです。朝 4 時起きして 10kg 以上の米を背負い家から国鉄の駅まで約一里（4km）の長い田舎道を歩き、駅から汽車で熱海に着くとそこから又徒歩で旅館街へ向かい行商したそうです。車でどこへも楽に行ける生活に慣れていた私には、なかなか信じられなかったのですが、そこまで骨身を削り私達を育ててくれた証（あかし）とも云える母の話には驚き、胸が熱くなりました。けれども、当時は米の自由販売は禁止だと知り、体力的にもきつく長続きしなかったようです。

敗戦後日本は、25 年程経ってやっと経済が上向き、やがて世界から注目される経済大国に発展し人の暮らしも便利で豊かになっていきました。私が初めて自分の車を買えた時、母と 2 人で土地付きの住宅を入手した時、「夢のようだね」と共に喜び合いました。

母の 95 年の人生は、自分の 2 人の子供の為にあり、それ故に強くたくましく生き抜くことが出来たと母はよく言って居りました。そんな母の愛に守られ支えられた私の人生は、いつも安心で幸せでした。亡くなって 10 年経った今も、母への熱い想いは尽きることはありません。